令和５年度　自然史博物館活動の評価結果

令和６年１２月２２日
群馬県立自然史博物館

１　はじめに

本評価は、平成 23 年度に策定した「活動目標の評価指標表（評価指標）」を用いた内部評価であり今回で 13 回目となるものである。本評価結果を踏まえ、今後の博物館活動の改善と充実につなげていきたい。

２　評価方法等について

（１）評価指標

評価指標は、令和 4 年度に実施した評価結果を踏まえ、令和 5 年度目標値として設定を行っている。

（２）評価作業

評価作業は職員 10 名による内部評価ＷＧが中心となって進め、素案作成後、職員全員で決定するという方法によった。

（３）結果の公表

評価結果については、全職員にフィードバックし、個々の業務改善につなげるほか、ＨＰにて公表し、県有施設としての説明責任を果たすために役立てたい。

※　博物館活動の評価に至る経緯、自然史博物館の使命と事業方針等は、平成 23 年度の評価結果を参照してください。

３　外部評価

平成 24 年度の評価から導入し、博物館活動に造詣の深い 3 名の外部有識者を専門委員に委嘱し、博物館活動に対する意見を毎年いただいている。昨年度の評価は、令和 5 年 12 月 20 日に評価委員会を開催して意見交換を行った後、翌年 1 月 22 日に意見の公表を行った。

口頭及び文書で多岐にわたる有益な意見をいただき、特に収蔵スペース不足への対応、広報、オンラインの活用については館内で検討を継続し、一つずつ取組を進めているところである。

４　自己評価結果

（１）資料の収集・保存と活用　（「未来に伝える博物館」）

資料の収集では、収集し登録した資料の合計点数は、目標値 6,000 点を 1,774 点下回る 4,226 点（前年度比 967 点減）であった。追加される資料数は年度ごとに大きく変わるが、令和 5 年度は、学芸職員の入れ替わりや、みなかみ町南部及び周辺地域を学術調査の調査地とした初年度にあたり、情報収集や事前調査とともに、現地調査を行ったため、職員が収集し登録した資料数が目標値を大きく下回ったと考えられる。

新規寄贈は 1,312 点であった。過年度に寄贈いただいた鉱物・岩石等標本の登録作業が進んだため（鉱物・岩石等標本 1,024 点）、昨年度より寄贈標本点数はかなり増加しているが、他分野の寄贈等の点数は、例年並みである。収蔵庫のひっ迫状況に鑑み、令和 2 年度に緊急時対応として暫定的な寄贈受入基準の見直しを行い、それに基づいて運用をしている。

資料保存について、一部の資料を除き、資料は温湿度管理、日常の点検、定期的な燻蒸等により管理されている。ESCO 事業導入後、収蔵庫の温湿度は新たな空調機器により管理されている。さらに、令和 3 年度に常設展示室の加湿器の修繕を行うなどして、湿度の調整を行っている。今後も微調整を加えながら適切な運用を継続したい。収集資料のデータベースは、第 4 次システムに引き続き、第 5 次システムも館外のサーバー（クラウド）での保存が行われている。今後も微調整を加えながら適切な運用を継続したい。

収蔵スペースの不足は以前から深刻な問題となっており、第一収蔵庫・第二収蔵庫ともに慢性的かつ深刻な課題は解消できていない。また、図書室書籍の収蔵スペースに関しても同様の状況である。温湿度が管理された収蔵庫での資料保存を優先するために収蔵・配架を行ったので、分類群ごとの整頓、資料を安全に出し入れできる配架、資料を運搬する動線など、配慮しきれないところがある。各種調査活動に伴い毎年増える証拠標本は、永年に渡り受け継がれる資料であることを考えると収蔵庫に保管していかなくてはならない。そのため、収蔵スペースに対して資料がオーバーフローしている非常事態となっている。資料活用時の作業のたびに通路の標本を移動させる必要があるため、資料を破損させる危険性が伴い、通常より労力と繊細な作業が求められている。

収蔵スペース確保のための取組として、定期的に収蔵庫の棚や床の配架率調査を行っている。100%近い棚に加え、通路にも仮置きされた状態である。

次に、標本の再配架を行いスペースの確保に取り組んだ。しかし、再配架では十分なスペースが確保できていない。さらに、標本数をコントロールするため、収蔵基準を設けている。また、前述のとおり資料の受け入れについては、受入基準の見直しを行い、制限を設けている。しかし、収蔵資料は今後も増え続けるため、収蔵庫の必要性を働きかけていきたい。

資料の活用について、企画展などでの資料公開、他館への資料貸出、学校関係などへの教育普及面での資料貸出、レファレンス対応や研究者などによる特別観覧などの事例があり、今年度も収蔵資料は活用された。特に学校関係への貸出では、新学習指導要

領が全面実施され学習内容の変化により、中学校は草食動物と肉食動物の頭骨標本の需要が増え、小学校は化石のレプリカ作成セットの需要が増えている。また、企画展が各地で開催されるなど、貸出件数は前年度の実績値より増加している。

（２）調査研究　（「魅力を引き出す博物館」）

調査研究の推進では、令和 5 年度は、令和 4 年度まで行われたみなかみ地域総合学術調査の調査範囲の一部に、隣接地域を加えて、新たにみなかみ町南部及び周辺地域学術調査として、令和 5 年度より 3 ヶ年（報告書は令和 8 年度発行）として実施した。本年度は、その初年度で、情報収集や、文献・標本等による事前調査とともに、現地調査は 20 回実施した。この回数は当初の想定通りの回数である。

各職員が独自に行っている調査研究は 15 分野 32 研究、外部研究施設等と連携している調査研究は 42 研究で、前年度並みで推移した。職員の論文発表は 28 本、学会等発表数は、22 タイトルで、いずれも新型コロナウイルス感染症流行前の水準に戻ったと考えられる。また、学会等の開催形式も昨年のリモート主体から、対面形式やハイブリッド形式のものに戻ってきた。一般向け雑誌等への発表は 16 件で、前年度比 5 件増となったが、ラジオ・テレビでの発表が増えたことが理由として考えられる。

外部連携・招聘による講演会講座等数は 13 件で、新型コロナウイルス感染症蔓延期（令和 3 年度実績：5 件）から回復しつつあるが、一方で、事業としての見直しや団体の高齢化・過疎化等で継続困難になったものもあり、感染症蔓延時以前の半分程度にとどまっている。特に市民講座的な講演会、高齢者向けの講座は影響が大きいと考えられる。市民参加型調査や市民連携の調査は 4 件で、前年度比 2 件減となっているが、長期的に見ると安定して実施している。

令和 5 年度の調査研究活動を総括すると、前年度からの学会発表や外部研究機関との連携・共同研究の回復傾向はより顕著となり、新型コロナウイルス感染症影響前の水準に達したと言える。一方で、講演会・講習会の件数の回復はこれらより緩やかである。特にいまだ新型コロナウイルスが存在する中の高齢者向けの講演会などはリモート開催が困難であり、また、過去の依頼主の中には複数年にわたる自粛生活の中で講演会の企画・運営ができなくなった例もあると考えられる。

今後、依頼を受けての講演会の講師派遣とともに、館主導のアウトリーチ活動や、講演・講習のメニュー開発も求められると考えられる。自然史調査は、本年度より新たな事業が行われるが、調査域の一部に前年度まで行ってきた地域を含み、また隣接地域を対象地域として加えた。このため、新規事業への移行はスムーズに行われたと考えられる。本調査事業については、引き続きみなかみ町や日本自然保護協会との連携とともに、群馬県立北毛青少年自然の家や、群馬県 21 世紀の森林公園との連携も考えられる。

（３）展　示　（「知を広め、高める博物館」）

令和 5 年度は新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置付けが季節性インフルエンザと同じ 5 類に移行し、活動制限がほぼ無くなったため、社会全体で人の動きも活発になった。当館の活動もコロナ禍前の活動で改善すべき点は改善しつつ、講演会やワークショップ等の参加人数など、以前と同じようにできるようになった。観覧者数は人の動きが活発になったことに加え、人気ゲーム『ポケットモンスター』シリーズの世界観を通して古生物学について学べる企画展「ポケモン化石博物館」（観覧者数 191,653 人、当館企画展最多）を開催したことから当初の目標値である 25 万人を上回る 291,128 人となり、開館以来最多となった。また、年度をまたいで開催された企画展「毒展」も、コロナ禍における活動制限の中にも関わらず春期企画展として過去最多の観覧者数を記録している。

展示標本では、2022 年 12 月 3 日からふじのくに地球環境史ミュージアムに貸出中であったヤベオオツノジカが 2023 年 5 月 10 日に返却されたため、直ちに展示に戻し、代替標本のニッポンサイを収蔵庫に戻した。さらに企画展開催中はコラボレーション企画としてトリケラトプスの頭骨模型 3 点やプテラノドンの幼体模型を追加展示し、解説パネル 7 点も設置した。追加・更新資料としては、コスモケラトプスの頭骨模型の 1 点となり目標値 50 点を下回ったが、開館 27 年目を迎え、パネル等の劣化への対応のため、パネル更新は 67 点となった。

解説員による解説も、コロナ禍前同様、実施されるようになり、定時解説の参加者は 2,730 人、随時解説の参加者は 18,018 人と、ともに目標値である 1,500 人、10,000 人を大きく上回ったが、1～4 月までは新型コロナウイルス感染症感染防止のための制限があったため、コロナ禍前のそれぞれ 3,000 人台、40,000 人台には戻っていない。令和 6 年度には解説の実施もコロナ前と同様に実施できるため、さらなる参加者の回復を目指したい。

その他の指標では、アンケートにもとづいたリピーター率が昨年同様 72％と高い数値を維持した。また、アンケートによる常設展の満足度は 100％、企画展の満足度は 99％とどちらも高い数値となった。これらの結果から、常設展に加え、魅力ある企画展・特別展やトピックス展により、過去に来館いただいた観覧者の満足度が高く、再び来館する契機になったと考えられる。

（４）教育普及（「知を広め、高める博物館」－わくわく・ドキドキ・新発見－）

令和 5 年度の教育普及活動は、新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置付けが 5 類に移行したことで、バックヤードツアーの再開など普及事業が数・質ともに充実し参加者数の増加と参加者満足度の向上につながった。

また、学校へのＰＲ活動として理科主任会や研修会等での博物館利用に係るＰＲを進めるとともに、「教員のための博物館の日 in 群馬 2023」を開催し、効果的な博学連

携について様々な機会を捉えて情報提供を行ってきた。その結果、教育用資料貸出や職場体験活動において活用件数が増加した。館内授業については、インディアナポリス子ども博物館との連携事業等、教育普及事業の多角化に伴い実施方法を見直したため実施回数が減少したが、教育普及事業全体では数・質ともに向上している。

ボランティアについては、行動制限が一層緩和され活発な活動が継続しており、解説ボランティアの廃止により登録者数は減少したものの延べ活動人数は 908 名（前年度比 144%）と大幅に増加した。また、個人の高校生や部活動での参加などボランティアの若返り傾向が続いている。令和 6 年度も博物館運営に欠かせないボランティアが活動の場を持てるようにしていきたい。

友の会活動では、会員数が大幅に増加しコロナ禍前の会員数に戻りつつある。企画展が好評で来館者数が大幅に増加したことも会員数の増加につながったと考える。友の会行事への講師支援を 4 年ぶりに複数回実施できたことは、友の会活動の充実につながった。

（５）情報の発信と公開　（「知を広め、高める博物館」）

令和 5 年度は、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行し、アフターコロナの中で博物館活動を進めていく 1 年間となった。各メディア（新聞やラジオ・テレビなど）への情報発信件数は前年度並みで推移している。(館からの発信：162 件［前年度 176 件］、メディアの取材対応件数は 50 件［前年度 54 件］)

博物館ホームページが 10 月に新システムに更新となり、10 月から 3 月までの更新数を計上しているため、更新件数は 47 件と減少している。SNS については、博物館活動について広く情報発信をするツールととらえ Facebook、X、Instagram を運用し、幅広い客層をターゲットにリアルタイムの博物館情報を発信した（令和 5 年度末フォロワー数：Facebook 1,407 件〔年間投稿数 108 件〕、X 1,983 件〔年間投稿数 112 件〕、Instagram 602 件〔年間投稿数 85 件〕）。タイムリーな情報をお届けすると共に、新たなフォロワー獲得に向けても広報活動を充実させていきたい。群馬県の動画情報発信サイト tsulunos（ツルノス）には、当館オリジナルの動画を 25 本（前年度 38 本）掲載している。

また、当館の出版物として研究報告、企画展毎のポスターやチラシ、図録の発行、イベントカレンダー（上期・下期）や博物館だより「デメテール」（2 回）を発刊した。文真堂書店や上信電鉄等の企業と連携しながら博物館情報について広く県民に周知することも行った。情報発信については時代の流れやニーズを読み取り、その都度、有効な手段を検討しながら行っていく必要があると考えている。

（６）シンクタンクとしての社会貢献　（「知を広め、高める博物館」）

自治体や各種機関・団体・一般などの外部からの要望に応えるために、当館で有する

様々な資源（資料・情報及び職員の専門性）を活用し専門知識を提供することは、公共の博物館としての重要な使命の一つである。

外部からの要望の１つ目は、自治体や各種機関・団体・学会・博物館施設等から、当館職員を委員やアドバイザーとして迎えたいということである。当館では、できるだけ委員やアドバイザーを受託したいと考えているが、業務過多となることは避ける必要もあるため、受託件数は現状維持を目標値として設定している。令和５年度の受託件数は、例年と同程度であった。

外部からの要望の２つ目は、レファレンス対応を始め、博物館実習等の大学生・院生の受け入れ、他機関への講師派遣、他館への資料貸出などである。これらの要望は、外部からの要望のため目標値を設定していない。令和５年度の外部からの要望件数は、例年とほぼ同程度であった。今後も、できるだけ専門知識を提供し、シンクタンクとしての機能を充実させ、社会貢献を果たしていきたい。

（７）マネージメント　（経営）

平成 28 年度にこれからの 10 年の館運営の基本的な考え方や理念や使命、機能、事業活動方針と事業展開方向などを盛り込んだ基本構想「自然史博物館のこれからの 10 年」を公表し、その構想に則して事業展開を進めてきた。令和５年度は、運営委員を中心に、次の 10 年を見据えた新たな基本構想についての改訂作業を開始した。

安全で利用しやすい博物館施設への改善では、施設改修等は予算的な制約から大幅な進展は見込めない状況であるが、開館後 27 年が経ち、建物の老朽化が見られる。今年度は、常設展示室階段手摺設置、情報コーナー床修繕、トイレ手洗い水栓修繕等の工事を行った。今後も観覧者の安全・安心を確保し、居心地よく利用していただくことができるように対応していきたい。

情報システム関連は、令和５年 10 月１日より第５次システムの運用を開始した。
第４次システムでは、館内の業務系・展示系の情報機器をネットワークで繋いだオールインワンのシステム構成であったが、第５次システムから、普及広報システム、展　示情報システムを切り離すこととなった。また、従来のシステムの経年による機器更新に加え、第４次
情報システムより実施している一部のサーバーのクラウド化など、一層の県民サービスの向上、安定性の向上を図った。

常設展示の展示資料については、開館時から大規模な更新をしておらず、資料の傷みや機器の故障が目立ってきている。今後、可能な限り計画的な修繕・更新に努めたい。観覧者サービスの点検と質的向上については、スタッフの接遇研修を継続することで、観覧者サービスの一定の水準の確保を図ったが、更なる向上を目指したい。

博物館認知度の向上と利用者層の拡大のための広報活動としては、ＳＮＳや新聞・ラジオなどのメディアを活用して博物館情報を発信することで、博物館来館者のエリア

拡大や利用者層の拡大に繋げて、来館者数の増加を図りたい。
職員の意識改革と資質の向上については、研修会・学会等への参加が少ない状況にある。予算上の制約や職員の業務負担等が課題として挙げられるが、博物館を一層魅力的なものにしていくためにも、職員には継続的なレベルアップが求められており、積極的な参加等を呼びかけていきたい。

博物館活動への理解及び外部協力の確保については、令和 5 年度においては企業から助成を得ることができなかった。引き続き外部資金の導入に努めていきたい。
防災意識の向上と危機管理体制の強化については、危機管理マニュアルに基づき防災訓練と地震訓練を各 1 回ずつ行った。危機管理マニュアルについては、随時必要な見直しを行っていきたい。

博物館評価システムの構築では、平成 25 年度から外部評価を導入し有識者から意見をいただきＨＰで公開している。いただいた意見を受け止め、今後の博物館活動に生かしていきたい。

（８）博物館基本構想実現に向けた取組

博物館基本構想は、開館 20 周年を節目に今後 10 年間の当館が目指すべき中・長期的な目標をまとめたものである。また、当館の評価委員会では、その年度に作成された年報を基に、定められた指標の目標値を設定し、様々な取組を行ってきている。

令和元年度からこの内部評価に、博物館基本構想に関わる職員の意識傾向を取り入れた。このことにより、館内の評価から改善への移行が、より一層促進されると考え、最終項目に付加した。以下の表は、今年度の職員の意識傾向を示したものである。

この結果より、大区分では「博物館に必要な施設」を除き、全体的に肯定的意見が 8 割を超えていた。特に、「強化・充実・発展機能」における「シンクタンク的機能」項目に関しては 95%と非常に高い数値であった。当館で有する様々な資源（資料・情報及び職員の専門性）を活用し専門知識を提供することは、公共の博物館としての重要な使命の一つである。引き続きシンクタンクとしての博物館の強みを生かしながら社会貢献を果たしたい。一方、「博物館に必要な施設」では、ここ数年 6 割台と低迷している。その中でも、特に下げ幅が大きい項目は、「憩いのゾーン」（17pt 減）、「収蔵ゾーン」（11pt 減）である。「憩いのゾーン」の設問内容は、「憩いの空間を創出するため、中庭や休憩室を改善しようと積極的に取り組めていますか。」である。開館から 27 年が経過し、施設全体の老朽化に加え、トイレや授乳室、エレベーターなど構造上の課題を抱えている。中庭や休憩室などの憩いの空間においても、現状に不十分さを感じている職員が多いことが数値からうかがえる。ユニバーサルな環境、居心地のよさへの意識の高まりを大切にしていきながら、今後の改善につなげていく必要がある。「収蔵ゾーン」に関しては、収蔵スペース不足により、標本を収蔵庫外に置かざるを得ない状況や作業スペースの制限により、本来の機能が果たせていない状況が続いており、今回も

低い数値となってあらわれている。

ここ数年、低迷していた大区分「事業展開方向」の「資料が活用できる博物館へ」項目に関しては、昨年度を 21pt 上回る高い数値だった。収蔵施設の不足を深刻な課題としてとらえながらも、資料整理や収蔵資料登録、再配架による収蔵スペースの捻出など、できるところから改善を進め、誰もが利用しやすい「資料が活用できる博物館」を目指してきた取組が、職員の意識の中で肯定的意見として反映されたのではと考える。

基本構想の区分と職員の意識からみた達成状況（肯定的意見の％）　＊職員アンケートの肯定的意見（2＋3）と否定的意見（4＋5）の割合から算出

区分	区分	項目	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	前年度比
○群馬県立自然史博物館に求められる機能 令和元年（71％） 令和2年（78％） 令和3年（86％） 令和4年（83％） **令和5年（83％）→**	○継続する機能・博物館活動の基盤となる機能・博物館に求められる機能と場 令和元年（61％） 令和2年（67％） 令和3年（82％） 令和4年（81％） **令和5年（81％）→**	（1）調査研究機能（1～5）	66%	77%	85%	84%	83%	−1pt
		（2）資料収集補完機能（6～9）	59%	59%	86%	85%	80%	−5pt
		（3）管理運営機能（10～17）	52%	64%	75%	75%	81%	6pt
	○強化・充実・発展機能 令和元年（72％） 令和2年（77％） 令和3年（84％） 令和4年（82％） **令和5年（86％）↑**	（1）シンクタンク的機能（18～19）	67%	74%	94%	85%	95%	10pt
		（2）資料収集補完機能（6～9）自然史学習支援機能（20～21）	65%	82%	83%	81%	82%	1pt
		（3）次世代育成機能（22）	84%	75%	76%	80%	82%	2pt
	○新規追加機能 令和元年（79％） 令和2年（91％） 令和3年（91％） 令和4年（87％） **令和5年（80％）↓**	（1）参画型調査研究機能（23）	84%	88%	82%	80%	60%	−20pt
		（2）県民活動、連携協働拠点機能（24）	74%	94%	100%	93%	100%	7pt
○これからの事業活動方針と展開方向 令和元年（61％） 令和2年（74％） 令和3年（82％） 令和4年（79％） **令和5年（81％）↑**	○事業展開方向 令和元年（61％） 令和2年（74％） 令和3年（82％） 令和4年（79％） **令和5年（81％）↑**	（1）資料が活用できる博物館へ（25）	30%	50%	59%	59%	80%	21pt
		（2）研究を進めて活かせる博物館へ（26～31）	59%	80%	91%	83%	78%	−5pt
		（3）最新の情報を発信し続ける博物館へ（32～34）	56%	64%	69%	77%	76%	−1pt
		（4）多様な"なぜ"を触発し創造的な活動ができる博物館へ（35～3	68%	69%	82%	78%	75%	−3pt
		（5）担い手とフィールドをつなぐ役割を担う博物館へ（38）	81%	88%	100%	94%	100%	6pt
		（6）頼れる存在である博物館へ（39～44）	70%	92%	91%	85%	78%	−7pt
○施設計画 令和元年（51％） 令和2年（58％） 令和3年（69％） 令和4年（63％） **令和5年（60％）↓**	○博物館に必要な施設 令和元年（51％） 令和2年（58％） 令和3年（69％） 令和4年（63％） **令和5年（60％）↓**	（1）知的好奇心を刺激する展示ゾーン（45）	64%	87%	88%	87%	78%	−5pt
		（2）担い手活動ゾーン（46～48）	30%	30%	49%	37%	49%	12pt
		（3）憩いのゾーン（49～50）	49%	47%	51%	49%	32%	−17pt
		（4）調査研究ゾーン（51～52）	48%	53%	71%	58%	66%	8pt
		（5）収蔵ゾーン（53～57）	63%	72%	86%	85%	74%	−11pt
○運営方式 令和元年（96％） 令和2年（98％） 令和3年（96％） 令和4年（96％） **令和5年（100％）↑**	○運営方式 令和元年（96％） 令和2年（98％） 令和3年（96％） 令和4年（96％） **令和5年（100％）↑**	運営・評価等（58～60）	96%	98%	96%	96%	100%	4pt